

スナップ

幼き者の声

—おばあちゃん

園長日誌から—

瀬底 ノリ子

「なつかしい」

秋も深まると、日の暮れが早くなり、保育園の玄関には、子ども達を迎えに来る保護者のあたたかい足音がひろがる。

赤ちゃんの部屋で、妹の帰り支度をしているお母さんを待っているSちゃんが、

「なつかしい」

と、つぶやいている。かぶと虫の観察箱や色々の形のどんぐりのビン。それがおいてある机に頬をつけ、観察箱を指でなで、どんぐりをいじりながらのひとりごと。

四才になったばかりのSちゃん。Sちゃんにとって、園の玄関も観察箱も、ごく日常的な風景のはずだが、

「なつかしい」

と小さい声をくりかえす。

お母さんはまだ来ない。

窓の外に、向こうの丘の樹影が、深い紺色と夕日の残照を背に黒く浮かび上がっている。Sちゃんは、ほんの数秒、窓に額をつけて静かにその光景と向き合った後、ふりむいて、

「先生、なつかしいね。」

と言い、お母さんの呼ぶ声の元に小走りに戻って行った。

幼いSちゃんの胸に去来する「なつかしい」という思いは何なのか、いつの間にか私の中の幼い日の「なつかしい」思いを辿った秋の夕暮。

「うんどう会のおいだよね。」

少し湿った風のふきわたる運動会の朝。

先生達、運動会係のボランティアのお父さんお母さん達は、ライン引きやテント張りで大忙し。集合時間までの間、子ども達も大はしゃぎで園庭を駆けまわり、

「始まる前に、ころばないで。」

と注意されている。

園庭の一段高くなつた場所にあるキンモクセイの木の下で、目をつむって静かに深呼吸吸しているHくん。

「このにおいだよね。うんどう会のにおい

だよね。」

一瞬、目の前の慌しさにとぎやかさが背景になる。

「ボク、リレーがんばるんだ。」

Hくんはキンモクセイのにおいを胸いっぱい吸いこんで、風のように走る。

「かまきりはね、会ったの。」

砂場のふちに座って、紅葉した花みずきの葉を陽にかざして見ていたら、年長組のKくんがそつととなりにやって来て、

K「うつくしいの?」

ときく。一緒に並んで一葉の落ち葉を見上げる。

K「うつくしいの、ほかにもあるよ。」

日ごろ、ボール遊びに命懸けみたいなKくんの思いがけないことばに、次のことばを待つ。

K「赤とんぼとかまきりとくらげ。」

T「赤とんぼ、見たことあるの?」

K「川のところでころんで、血が出そうになつたの。ここ。誰もいなくて、上を見たら空に赤とんぼがとんでたんだよ。いったりきたり。それから、おじいちゃんが連れにきたの。」

K「かまきりはね、会ったの。」

T「会ったの?」

K「葉っぱを見ていたら、急に來たの。びつくりしたら、かまきりもびつくりして両方の手をひらいて、びつくりしたって言って、ずっと見ていたから、ボクも見ていたの。」

T「かまきり、うつくしかったの？」

K「うつくしいよ。とんだんだよ。」

かまきりの三角の頭と大きな眼、細い首や精緻で繊細な前肢を思い浮かべる。パッと幾重にも開く翅を想う。Kくんもそれを見たのだ。

「くらげは？」

とは、もう聞かない。

私自身の脳裡に、記憶されている青い大きな水槽に呼吸するように舞い浮かぶくらげの

姿がいっぱいに広がる。

ゆらゆら動くくらげの真似をして、

T「くらげはうつくしいよね。」

と笑い合う。秋の光の中で、大きいくらげと小さいくらげ。

「何してるの？」

と子ども達が集まってくる。

「くらげっこ。」

「でもね、今はもう○○○○○。」

何のやりとりがあったのか知らないが、目に涙を浮かべて、友だちの輪から離れて、こちらに向かって走って來たかと思うと、私のエプロンの下に顔を隠すJくん。久しぶりだ

ね。ひとまわり大きくなった背中。少しの間、エプロンからはみ出しそうな温かい生命のかたまりを抱く。

ごそごそと動いて、エプロンの下から顔を出したJくん。

「ボクね。小さい頃、いつもアンパンマンのぬいぐるみと一緒に寝てたんだよ。でもね、今はもう寝てないの。」

「大丈夫？」と声をかける間もなく、また少し大きくなった後ろ姿を見せて走っていく。私のエプロンの下にアンパンマンがいたのかな。

(横浜・青葉台幼稚園)

スナップ 再掲④

(えり、3歳女子。けん、6歳男子)

男と女の呼び方1……………10号

えり「これ、えりのだよ。」

けん「えり、えりって。言っちゃあいけないの。」

女の子は、わたしって言うの。」

えり「えっ？」

男と女の呼び方2……………10号

けん「はくね、これから、オレって言うよ。」

だって、これだってオレのもんでしょ。僕って

言うより、オレって言う方が、男なんだ。」

えり「オレだって。オレだって。」

けん「(こわい顔をして)「えりは、言っちゃあい

けないの！女なんだから……」

(4才11ヶ月)

夢の中……………7号

いつも。朝、目がさめると、ベッドに入ったま

まで、突然、話し出すことを常としているが、ある朝のこと。

子「ねえ、ママ。私ね。ねている時は、おふ

とんの中にはいないんだよ。」

母「????(寝相が悪いわけではないのに。)」

子「だってね。私、夢を見るといつも夢の中

にいるんだよ。だからおふとんの中にはいないの。」

母「今、おふとんの中にいるじゃない？」

子「今は、夢の中から、おふとんに帰ってき

たんだよ。」

たんだよ。」